

年次大会報告⑧

石田梅岩が事業承継で示唆する所

後藤 三愚

(心学修正舎・理事)

事業承継学会の年次大会のご案内にあったテーマ・「人と企業の寿命から考える」の一言には日本古来伝統の心を示唆する所があります。60年ほど前、社会へ出て営業マンとして親しんだ石田梅岩の「正直」の実践で遭遇した「妙なる」体験から「神の手に導かれる」体験に至る過程で得られた…絶対的個人の自分が生きることと他者が生きること、更に人間集団としての共同体・企業が生きる、永続を図ることは皆通じている、という絶対的確信は時代が如何に変わっても人間社会の永遠不易の真理である…と考えます。

(1) 先ず現在の「日本の社会状況の認識」についてですが…

1. モノ作りの工業化社会の永い歴史を牽引してきた“科学知”も人工知能を生み、クラウドなる倫理観無き巨大空間を操るプラットフォームの出現など（人間社会の全てではないが）情報支配の脱工業化社会へと化しつつある。
2. またモノ・カネ・人の流れ・行動を“眼で見て”人や企業の良心・正邪善悪を判断した社会から、利便性の視点だけでそれ等の姿形も“見ず”におカネの受け取り窓口を争奪支配しようとする“利己的・独善的”な事業主体の姿も“見えない”危い、“非人間的”な世界へと進んでいる。
3. 更に日本も世界のグローバル化、多様化が進む中でこの非人間的な利己的の極みである

“独善的な西洋の“知・デジタル”金銭資本主義を安易に受容し、日本伝統のアナログ的“情・人間性”の温かい“共生的な社会や永続を願う”心が社会のリーダーから失われつつある…と考えます。

(2) その“不易”の心の真理とは…

梅岩の心は日本古来伝統文化の基盤、神儒仏・三教に一貫して流れる心で柱は「孔孟の儒」にあり、古代仁徳天皇の“民の竈は賑わいにけり”の心から聖徳太子の（政治に携わる者の心得としての）「十七条の憲法」の精神以来の伝統の心を忠実に承継し、新渡戸稲造が讃えた武士道の精神にも優る“天地神明十方に恥じず”の共同体統治・ガバナンスの“不易の真理”があり、しかも現代世界が必要とする素晴らしい“現代性と国際性”があります。

その日本人が考える不易の真理とは一口にはその本質を言葉で尽くせませんが…

1. 人間の真の存在価値は絶対的個人ではなく“共生的個人”にあるとし、人間集団である商家（企業）も（権力者）自己の所有でなく社会的存在の運命共同体であるとし、しかもその共同体“全体の道徳倫理観”は権力者・トップの人間性が代表する、と考える所にあります。（西洋では倫理観は人間としての絶対的個人しか持ち得ない故に人間集団である共同体組織は倫理観は持ち得ないとします）
2. また人間には万物の霊長として世界万物統治

の力として…「心」として「(非人間的性向の)知性」と「(人間らしさ・感性の)情」が賦与されているとし、そこから生まれる已むに已まざる、相反する二心、“利己心”と“利他心”を有している、と言う所にあります。(西洋は知性・インテリジェンスで人間評価をするが日本の伝統は知性と情・感性の両方を以て人間を評価します)

3. 更に人間の究極の喜びは(欲に目が眩くらんでいる人の心奥にも)利己心の物質的・名利的欲の満足より家族と共にする“幸福感”にあること、また他者の利己心の満足・感謝を得られた時の喜びの方が“大きい”と言う所にあります。
4. 依って事業経営に於いて社会の評価・ご満足を得る道は利己心から生まれる“義務感”では他の利己心の有する“期待感”を超えるご満足は絶対に得られず、(自ら効率よく生きる道は)利他心からの“使命感”しかない、(そうしなければ奪うか盗むかの道しかない)と言う所にあります。(是を納得するには人間は皆“地磁気”の中に生きてるので人間は切っても切り離せない、相反する二心を有する棒磁石と考えれば利己心を以て他の利己心に当たれば反発し、利他心を以て他の利己心に当たれば互いに引き合い、少なくとも反発はないのは明らかな天理です。梅岩はそれに加えて“一つの智慧”が必要と言っています。)
5. また社会や共同体に於いて“自と他”相互の間に働く、互いの満足感には盲点があり…売り手は商品サービスの納入義務を果たした時に満足を感じ易く、買い手は商品サービスを受け取った後に、(使ってみて、食べてみて)“遅れて”満足を感じるという“時差・タイムラグ”があると言う真理が隠されています。(明治維新以前に創業の長寿の老舗に共通す

る“お客様の心を冷やすは一瞬、温めるには時間がかかる”という悟りで、自分の信ずる所を行なっても他者の満足・「信」は直ぐには得られず、他者の信が還って来て初めて、強固な“二重結合の信”となり、安定した成長・永続が可能になると考えます。)

(3) それら「不易の真理」が梅岩の心にどの様に生かされているか、についてお話ししますと…

1. 商家の主人は広く人間関係を…妻や番頭は(我が信念と同じくする)“臣”と視て、家人(社員)は皆“我が子と同じ”と見て、世代の異なる多くの社員とその家族の(幸せな)“人生を請け負っている”、またお取引先の工職人を我ら商人を支えて呉れる運命共同体の一員としての“敬意”があり、お客様はその我々皆を食べさせて下さるとの“敬慎・思いやり・感謝”の心があります。
2. 人・モノ・事の万事に“正直・儉約・堪忍・一所懸命(誠実)”を説くことを通じて…利他に努めれば必ず神のお導きにより利己に還って来る、という信念があり“用心と安心”の自在の境地が得られる、その真髓は“堪忍”の心にある…と説きました。
3. 梅岩には「真の商人は“先も立つこと”を思い“我も立つことを思う”と言う強い信念と“貸さず、借りず、欲しがらず、争わず、急がず、怒らず”の天地神明十方に恥じずの不動心と危うき才・知を嫌う手堅い智慧・待つという“堪忍”・独立自尊の心があります。天道に従って商いすればいずれは必ず神のご加護があり、(その結果)富が山の如くになっても“欲心”からとは言えないと利に執着することを“卑しい”とした(武士道支配の)封建社会で(金銭至上の西洋資本主義と異なる)“聖

なる”利を求める道を主張しましたが 将に先見性と現代に通じる国際性があります。(この点については20年前、京都での心学開講270年記念シンポジウムにアメリカからお招きした、宗教社会学者のR・ベラー教授から「今アメリカは病んでいる」と述べられた上で「日本では何故 石田梅岩は二宮尊徳より 社会的評価が低いのか?」と尋ねられて 答えられなかったのですが、後で金銭至上の西洋近代科学資本主義の本質を学び、現在の西洋近代科学資本主義の原点は18世紀イギリスの経済学者・アダム・スミスの言葉にあり 梅岩や日本古来伝統の老舗の心とは 大きな根本的な違いがあることを知りました)。

4. また梅岩は「商い」の行為とは、商品売って終わりの“単発的”行為ではなく(先祖から受け継いだ家業と考えて)モノとサービスに我が誠心を載せて(他者に)繋ぐことに使命があると考えました。経営者の心として具体的に、梅岩語録では…権力者の主人は吾が一存で物事を決めてはならない、主人が独断専行し奢り・道理に外れる様なら総手代・家人一同相談の上遠慮せず意見し、正さざれば家督相続の害あり、先祖への大不孝者につき“隠居”させ、あてがい世帯にすべし、と言っています。この意味する所は家人を信頼し上下衆知を集めて議論を促し、経営は“ボトムアップ”であれ、と(支配する経営者と被支配者・社員間のフラクナ)“垂直の平等”の意識を説き 親子の情愛と社会的使命、社員との共生意識を優先して(同時に利の確保も重視して)“吾が子”への承継は厳しくあれと教えました。ここに社員を“伸び伸び”と働かせる、脱工業化社会の 知的労働者の能力・生産効率を上げる為の民主的な“近代的な智慧”があり、またこういう経営者でなければ

新しい意識の意欲ある現代の若者達を引き留められないでしょう。

(4) 以上から、梅岩が好ましい事業継承として示唆する所は…

事業承継は 急に考えても遅い 諸行無常の中に於ける権力者・経営者の“常の心”にあると言うことです。その常の心とは 企業が①安定した利益を生む体質にあり、②非常の備えの内部留保があり、③夢と希望の持てる社風文化とその証である、権力者と社員の間二重結合の厚い“信”があり、その為には④常に人間らしさの“情”の意識と“人望第一”の有徳の後継者を育てる努力が必要でその意味する所は…徳・人望あるトップ・権力者が 多彩な優れた“知”ある者を適材適所に用いるのが 好ましい共同体統治の鉄則であること…を示唆しています。

具体的に 梅岩の示唆する所は(進化発展した現代文明社会を考慮すると)

- ①ご子息に託したいとすれば 人望と意欲ある後継者に(日常生活の中で)貴方が厳しく育てられるかにあり、
- ②若しご子息が適わざれば 意欲ある娘さんを積極的に用いるか又は 娘さんに人望あるお婿さんを選び求めるべしと言え、
- ③またそれも成らずば 早めに無縁でも信頼出来る“我が信念を同じく”する、人望ある人に譲り、自分は敬慎の心で君臨し、次の世代の親族を育て繋ぐべしと言え、
- ④それも難しければ(社会に迷惑とならなければ)余裕ある時に(潔く)“廃業”すべし。また現代は 企業売却などの選択の道もありますが 新たな資本家・経営者の心に依り社員・お客様・お取引先の心情、“永年の信”を裏切ることのないよう、古来伝統の情の籠った“暖簾分け”の心で最後まで用心怠り

なく進めるべし、そこに真の私心無き、良心的な経営者の安心の境地がある、…と云うことになりましょうか。

<以上>